

ゆらぎ

凍りつく炎 守屋 信

あこがれ、というより、もつと激しく、燃え上がる嫉妬のようなものかもしれない。

その人の書くものは、刺されるような鋭い怒りやどろどろと永遠に続く悪夢や、どん底で情けなく生きる人々の諦め、失ったあとでようやく気がつく愛だったりする。どこからそんな言葉が生み出されるのかわからない。わかりそうだけれどわかりたくない。いや、やっぱりわかりたい。そんな気持ちが行ったり来たりする。

もつとその気狂いじみた言葉の繋がりを見ていたい。押し寄せる津波に飲まれる感覚を味わい尽くしたい。命がなくなってもいいときええと思う。

「読みやすい」と言われる屈辱は誰にもわからないだろう。一口飲んだら一生のたうち回って苦しむような、いつまでも逃れられない毒のようなものを書き残したい。この気持ちそのものが自分にとっての毒なのだと思う。

無慈悲、でもない 山本 タカノリ

何が語るに値するだろうか。憧れの対象についての熱意たっぷりの作文か。それとも、憧れという感情やその行動の適応的な価値か。それは社会心理学研究に任せよう（「期待」として表現できたりして）。きつと何かに対する理想を抱くことは基本的に（ある場合においては不適応をもたらすのだろうけど）人間の生活に貢献してるのだ。たぶん。

それはそうと、月に行ったときの話をしよう。たしか街の外れの会議場の向かいに情報センターがあった。月の環境は厳しい。食料資源も少

なければ、水も限られている。人的な資源も。そのせいか個人的な協力が地球よりも強いと感じる。環境整備がまだ不十分ということもあるかもしれない。人でサポートできることは人で済ませる。悪くない（いや、悪いという価値判断をすべきかわからない、単に彼らはその環境で生きてるんだ）。

憧れの対象はたいていシンプルだと思う（少なくとも未熟な僕にとつて）。憧れの対象がカオスなんてことは（シンプルの対義語がカオスだとは思っていないが）、数学者と物理学者でないと中々ないんじゃないか、よく知らないけど。

センターの付き添い人に対して憧れを抱いた。月の環境は地球生まれの者には心身ともに堪える。彼女はとても仕事ができる者だった。また、彼女のある行動に感動した。迷子を実に手際よく助けたのだ。地球であの手際の良さは見たことがない。そのこの慣習のせいかな、その中でも彼女が飛び抜けてそうだったのか分らない…（余白が足りない）。いや、他にもキツカケがあったかも知れないが忘れた。シンプルなんだ。

しかし、次第にそうではなくなってきた。月での生活が長くなったからかもしれない。地球よりも厳しいのだ。憧れや憧れの対象がシンプルでないことに気づいたとき、憧れは語るに値すると感じる。

無機物 茶夜

ルンバにはロボット用の天国があつて私はそこに行けない

この腕が茨のツルであつたなら好きになれたかもしれない体毛

そうね円周率も寂しかったね 君に苗字で名前を呼ばれて

無機物に愛はなくても湯たんぼは私を否定したりはしない

秘めやかなアンドロイドの呼吸音あの子は愛を吸い込んでいる